

国語（全学共通 60分 / 国語教育専攻 90分 200点）

注意事項

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- ② 解答にはHBまたはBの黒鉛筆（シャープペンシルはHBまたはBの芯であれば使用可）を使用しなさい。
- ③ **全学共通**の問題は、問題冊子前寄り**一・二・三**です。解答は、解答题紙の解答番号**1～50**内各解答欄にマークしなさい。氏名、受験番号、解答科目を記入し、受験番号、解答科目をマークしてから解答を始めます。例えば、**10**と表示のある問いで③と解答する場合は、下の（例）のように**解答番号10の解答欄の③にマーク**しなさい。
- ④ 教育学部教育学科**国語教育専攻を志願する者は、全学共通**の問題に加え**国語教育専攻**のみの問題にも解答しなさい。国語教育専攻を志願しない者は解答してはいけません。
- ⑤ **国語教育専攻**のみの問題は、問題冊子前寄り**一・二**の各問8と、後寄り**四・五**の全問です。解答は、解答题紙の解答番号**51～100**内各解答欄にマークしなさい。例えば、**51**は**解答番号51の解答欄**を指します。
- ⑥ いずれの解答题紙にも、**必要以外**のことを記した場合、その用紙にある**すべての解答を無効**とします。
- ⑦ 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答题紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。

| 解答番号 | 解 | 答 | 欄             |
|------|---|---|---------------|
| 10   | ① | ② | ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ |

（例）

※ 問題に使用した文章の表記は、一部改めた場合がある。

# 国語（全学共通）

\*全員が解答すること（国語教育専攻を志願する者も含む）。

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし問8（51）（52）は、教育学部教育学科国語教育専攻を志願する者のみ  
答えなさい。

近代の（注）藝術、というのは端的に藝術ということですが、なぜなら、ほかの文化圏においては、また西洋でも近代以前には、「藝術」の概念は存在しなかったからです。今日われわれが藝術と見做している作品のレパトリーは古今東西にわたる広大なものですが、それは、西洋近代において成立した藝術の概念を、それ以前の時代に、また異文化の世界に適用したものです。たとえば、百済（くだら）観音は仏像以外の何物でもありません。それを彫像と呼ぶことには何の問題もないでしょう。なぜなら、彫像とはある種類の制作物を指すニュートラルな言い方で、それに対応する概念が飛鳥（あすか）時代の日本にも存在したからです。ところが、藝術とは、広大な（びろ）の領域のなかからその一部分を切り出して、価値的に区別したものです。具体的に言えば、絵画は藝術ですが、家具を作るのは職人仕事ですし、さらに細かく言えば、油絵は藝術ですが、銭湯にある富士山のタイル画は職人仕事、という具合に区別されます。その区別の標（しるし）とされてきたのは作者の創造性ですし、作品に込められた精神的意味の深みです。ですから、単にバリバリと弾きまくるピアニストや、腕のたつだけの画家は、職人的と評されるわけです。その技巧が（a）鬼気（おにき）せまるものとなり、それがある精神のあり方（のぞ）を覗かせるとき、われわれはそこに藝術を認めるようになります。

このようにして、ものを作り出す仕事のなかで、実用目的をもたず（あるいはそれを最も重要な目的とせず）、したがって、とくに現実世界のすがたを再現する類のもののうち——藝術の古典的定義は、「自然模倣」という説です——、背後に精神的な次元を隠し持ち、それを開示することを真の目的としている活動が、近代的な意味での藝術です（二〇世紀になると、「現実世界の再現」は写真の意味（うしな）を喪い、現実の批判という性格を強めます）。（A）このような概念があるかどうかは、それまでも存在していた詩、音楽、絵画等々の活動を根本的に変貌させます。作者にしても観賞者にしても、その意識の焦点は、作品の表層から深層へと移行します。それまでこだわらなく愉（たの）しんでいた表層について、その根拠を求めるようになります。主役が作品から作者へと移ります。藝術家は典型的な天才として、人間の創造力——それは近代という時代のキー・ワードです——を（b）体現（ていけん）するスターとなります。ただし、もう一度申しますが、その創造力は理論と一体のものであるので、これは理論の、つまり美学の時代とも言えるわけです。

このような藝術概念はそれ自体が一つの理論です。その概念が成立しても、当初はさしたる変化もなく、藝術の歴史は続いているように見えます。しかし、その到達点を参照するとき、この概念／理論のもたらした深甚な効果を認めざるをえなくなります。（注）デ

ユシヤンの<sup>(注3)</sup>『泉』を想起して下さい。これが、理論的な新しさを求める近代的な藝術概念からのみ生まれ得たものであることは、明らかでしょう。たしかに、ロダンの作品のように、手の生み出した作品自体が、精神的な次元を含み、見方を心得たひとの眼差<sup>まな</sup>しに対して、その精神的な深みを示す、というようなものではありません。しかし、この<sup>(注4)</sup>レディ・メイドは、その示唆する理論抜きには単なる便器にすぎず、本書のなかで繰り返し言及するようなものにならなかったことも、間違いありません。ひとによってさまざまな読み取り方があるでしょうが、わたくしの理解によれば、その理論とは、《制度的に確立している観るための場所(展覧会場)に置かれれば、これだつて藝術になるのではないか》という<sup>B</sup>反語的な問題提起です。理論と一体化した藝術とは、比喻的な意味で、藝術の自己意識化と呼ぶことができるでしょう。そのような自意識の一つの極限をここに見ることができます。

近代藝術が、創作面で追求してきた創造性<sup>c</sup>||新しさの側面は、このように明らかです。しかし、この側面に注目する人びとは、<sup>c</sup>往々にして、もう一つの側面を忘れがちです。それは、同じ<sup>X</sup>な藝術概念が、古典的な作品群への関心を培ってきた、という事実です。まず、次のようなことを考えて下さい。文学作品は、普通、まず単行本として出版されます。サイズも厚さも、装丁もまちまちです。それらが成功を収めたとき、全集が刊行されます。今度は、サイズも厚さも装丁も、ほぼ統一が取れています。その統一が何に由来するか、と考えれば、自<sup>おの</sup>ずから作者に<sup>いた</sup>り着きます。書籍という物体の統一性は、作者の精神世界の統一性の反映にほかなりません。事実、個々の作品をよく理解しようとすれば、作者の全集を読むことが必要になる、というのは、今でも研究者や熱心な読者が経験していることです。作者の精神世界を直接知ることができれば、それはより手っとり早い手段になるでしょう。そこで、作者の自伝に対する興味がわいてくることになります。以上の話は、ゲーテの自伝『詩と真実』の序文に書かれていることです(念のために申し添えますと、このタイトルは作家としての活動と、個人としての生活の両面を、「詩」と「真実」という言葉で表したもので、とくに詩を表すドイツ語のDichtungには「創られたもの」あるいは「捏造<sup>ねつ</sup>されたもの」という意味があり、「真実」との対比が強調されています)。一九世紀の藝術研究が伝記というかたちで結晶することの多かったことは、このような考え方に由来しています。伝記は、読者にとっては、作品理解の手がかりとなり、研究者にとっては、作品理解の総括の意味をもっていたことが分かります。

今日の美学では、作者の証言やその生きざまに従って作品を理解するやり方は、正当なものとは考えられていません(ときに、この禁欲には行き過ぎがあるのではないか、と思われることさえあります)。しかし、このような考え方が作品を理解するために起こってきた、ということを想起して下さい。作品には背後があり、その背後こそが作品を藝術作品たらしめている、という近代的な藝術概

念が、全集という形態を生み、そこから「背後の思想」を解釈しようという動きを生み出してきたのです。このような動きは、現存の大作家の全集への関心にとどまらず、全藝術史へと広がってゆくことは必然です。《藝術史を識<sup>し</sup>らなければ、藝術は分らない》という現実が生まれてきています。近代藝術は、まさにその藝術概念ゆえに、藝術に関する教養を要求するものです。

日本の文化的伝統のなかに、過去の藝術に関する素養を重んずる考え方があります。「文人」と呼ばれた教養人たちにとって、そのような知識は必須のものであり、かれらの文人としてのステイタスの証明となるものでした。ときには、**Y**な教養の範囲を超える専門的な様相を見せることさえあります。藤原俊成や藤原定家(一二―一三世紀)の垣間見せている古典的な詩歌(漢詩と、『万葉集』以来の和歌)に関する知識は、ほとんど近代藝術の要求する知識のような徹底した広がりを見せています。このように過去の藝術を重んずる伝統があるために、われわれは、一方で西洋近代の藝術のあり方に親しみを感ずると同時に、他方では、**D**それを普遍的なもの<sup>と見做し</sup>、その特殊性に気づかない、ということがあるように思われます。日本の古来の藝術的教養の背後にも、当然、それを重んずる思想がありますが、それは「文」という知識そのものに対する尊敬です。しかし、右に説明してきたような近代藝術の場合は、根本的に事情を異にしています。

近代藝術は藝術に関する教養を、必須の成分として含んでいます。フランスの作家であり、文化情報相として、パリのノートルダムのような古い建造物の洗浄を行って中世の白さを蘇<sup>よみがえ</sup>らせるなど、**E**独創的な仕事をしたアンドレ・マルローの概念に、「図版による／空想の(imaginaire)美術館」というものがあります。いわゆる美術全集がそれに相当します。つまり、古今東西の傑作を図版として集めたものです。このような考え方は、デュシャンの造形美術、<sup>(注5)</sup>シエーンベルクや<sup>(注6)</sup>ジョン・ケージの音楽と同じように、近代藝術のもう一つの到達点です。しかも、一方が専門化して、少数の人びとの関心事になっていった反面において、多くの人びとが教養化された古い藝術を支持していることは、たびたび指摘してきましたが、重要なことです。モーツアルトやバッハの記念の年に、それぞれの「全集」が賑々しく刊行されたのをご記憶の方も、少なくないことでしょう。かつて、作曲家の全集と言えば、書籍のかたちの楽譜でした。それが、録音されたかたちで刊行されたのは、もちろん、画期的なことでした。何が画期的であるかと言って、それが、一部の専門家のためだけの全集ではなく、普通の音楽愛好家を対象とするものであるところが、驚くべき点です。単に音楽が好きだ、というだけならば、好きな曲だけを、好きなときに愉しめばよい、ということになりそうです。一人の作曲家の全作品に触れようというのは、真の意味でマニアック(狂気の沙汰)です。文学に始まり、美術や音楽に広がってきた《愛好家のための全集》という現象のなかに、まぎれもない近代美学(藝術観)の現れが見られます。ケージのみならずモーツアルトが、<sup>(注7)</sup>ボイスや<sup>(注8)</sup>ウ

オーホルだけでなくレンブラントやルノワールが、現代の藝術現象を構成しています。

(注) 1 藝術——「芸術」に同じ。

(佐々木健一『美学への招待』による)

2 デュシャン——フランス生まれの芸術家(一八八七～一九六八)。

3 『泉』——デュシャンは既製品の単なる男子用小便器を、『泉』と題した作品として展覧会に出品するなどして、既成の芸術概念を否定し、現代芸術に大きな影響を与えた。

4 レディ・メイド——ここでは、大量生産された既製品レディ・メイドからその機能を奪い「オブジェ」として陳列した、デュシャンによる作品概念を指す。

5 シェーンベルク——オーストリアの作曲家(一八七四～一九五二)。現代音楽の第一人者。

6 ジョン・ケージ——アメリカの作曲家(一九一二～一九九二)。作曲や演奏に偶然性を取り入れる手法で知られる。

7 ボイス——戦後を代表するドイツの芸術家(一九二二～一九八六)。

8 ウォーホル——アメリカの画家、版画家、芸術家(一九二八～一九八七)。

## 問 1

波線部 a、b、c の本文中の意味として最も適当なものを、それぞれ次の中から一つ選びなさい。解答番号は 1 ～ 3。

「a 鬼気せまる」

1

- |                 |                  |
|-----------------|------------------|
| ① 生命の危険が差し迫っている | ② 恐ろしいほどの完成度を誇る  |
| ③ 激しく高ぶり殺気立っている | ④ 人間離れた才能にあふれている |
| ⑤ すさまじい気迫が表れている |                  |

「b 体现する」

2

- |             |            |             |
|-------------|------------|-------------|
| ① 身体で表現する   | ② 具体的な形にする | ③ 意識世界に沈潜する |
| ④ 物体として提示する | ⑤ 作品に移行する  |             |

「c 往々にして」

3

- |                   |                  |
|-------------------|------------------|
| ① 事の成り行きでそうなってしまう | ② 同じことが何度も繰り返されて |
| ③ 二つのことを同時に処理できずに | ④ そうなる傾向がしばしばあつて |
| ⑤ 行ったり来たりで落ち着かないで |                  |

問2

X  
Y

に入る言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は4と5。

X

4

① 古典的

② 比喩的

③ 反語的

④ 制度的

⑤ 近代的

Y

5

① 専門的

② 近代的

③ 一般的

④ 画期的

⑤ 精神的

問3

「A このような概念があるかどうかは、それまでも存在していた詩、音楽、絵画等々の活動を根本的に変貌させます」とある

が、ここに示された事態の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は6。

① 近代藝術は、量的次元においては広大な領域の一部分を占めるだけなのに、精神的次元に関しては過去の藝術を超える圧倒的な権威を獲得するようになったこと。

② ものを作り出す仕事、実用性と精神性という相容れない観点から評価されるようになって、従来とは異なる区分でそれらの仕事とらえなおされるようになっていくこと。

③ 近代藝術の考え方が成立することで、従来の享受の仕方とは別に、広大な領域に属する仕事、精神性の有無という観点からその価値を評定されるようになっていくこと。

④ 過去の藝術作品とは違って近代以降の藝術作品を鑑賞する際には、作品の背後に秘められた作者の意図を、鑑賞者が創造的に読み込む作業が要請されるようになってきたこと。

⑤ 藝術家の精神面を強調する藝術概念が誕生するにおよんで、それまでのように単純に藝術作品を楽しむことができず、常に作品の価値や成立の根拠を問うようになったこと。

問 4

「B 反語的な問題提起」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **7**。

- ① 藝術家の自意識が強くなりすぎた結果として、制度的に確立している場のありかたにそぐわない作品が作られるようになったのではないか、ということ。
- ② 近代という時代はどんな藝術観も受け入れてしまったため、かえって反対に、藝術の制度的働きが重視されるようになったのではないか、ということ。
- ③ 藝術概念がどれほど新しくなろうとも、作品の藝術性の有無を決定するのは展覧会場といった伝統的な場所ではないのではないか、ということ。
- ④ ある作品が藝術であるということは、作品自体の価値に基づいて決まるのではなく、制度的な場に置かれることで決まるのではないか、ということ。
- ⑤ 藝術理論と作品との一体化が求められることによって、かえって理論的な深みを持たないありきたりの作品が増えつつあるのではないか、ということ。

問 5

「C 「背後の思想」を解釈しようという動き」とあるが、そうした「動き」に当てはまらないものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **8**。

- ① 作品を鑑賞する際、過去の藝術観やそのありようを参照しようとする。
- ② 天才藝術家の精神世界を理解し、それを現実社会に生かそうとする。
- ③ ある作品を深く理解するため、その作者の全作品に目を通そうとする。
- ④ 自伝や伝記を研究することを通して、作品理解を深めようとする。
- ⑤ 藝術家の精神を、その藝術家の人生に即して把握しようとする。

問6

「D それを普遍的なものに見做し、その特殊性に気づかない、ということがあるように思われます」とあるが、これはどういうことを言ったものか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **9**。

- ① われわれは、西洋近代が独自に生んだ、過去の藝術の歴史を踏まえた教養を要求するあり方を、自明のものとして受け止めてしまっている、ということ。
- ② われわれは、藝術的教養についての考え方をまったく異にしているにもかかわらず、西洋近代の藝術を絶対化してしまっている、ということ。
- ③ われわれは、日本と西洋の藝術の違いを考慮した上で、両者が共通に必要としている藝術的な教養や素養を自覚的に身に付けていく必要がある、ということ。
- ④ われわれは、西洋近代藝術に影響されながらも日本の伝統藝術を重んじるため、日本の古典を世界に通用するものだと思いつている、ということ。
- ⑤ われわれは、日本古来の藝術的素養をすでに身に付けているため、西洋藝術の鑑賞に必要な教養も、違和感なく受け入れることができる、ということ。

問7

本文の論旨と合致するものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **10**。

- ① 西洋の近代藝術が過去の藝術についての教養を必須のものとしているように、日本の近代藝術も過去の藝術に関する素養を重んじており、両者は一見似通っているが、西洋が精神を、日本が知識を偏重している点では、根本的に異なっていると言っている。
- ② 藝術という概念は西洋のしかも近代において獲得されたものであり、その意味では特殊なものでしかないのだが、近代の日本にもそれが押しつけられるようになって、今ではそれが、普遍的な藝術観であるかのように見做されるようになっていいる。
- ③ 藝術の領域において、一部の専門家の研究のためだけにあった全集や美術館というものが、普通の愛好家にとっても近い存在

④ 近代以降の藝術は、概念や理論を重視してきた点では、一部の関心しかひきつけない方向に進みしたが、藝術的教養を必須のものとした点では、多くの人々の過去の藝術への愛好心と結びつき、全体として、多様な藝術が受容される状況を生み出している。

⑤ 西洋の近代藝術においては、藝術家だけでなく藝術を鑑賞する人々にも、創造性と精神の統一性を身に付けることが求められているため、そうした雰囲気の中で創造され享受される藝術作品は、いわゆる実用的な作品とは価値的に切り離されている。

\* 次の問 8 (51 ～ 52) は、国語教育専攻を志願する者のみ解答すること。

問 8 「E 独創的な仕事」とあるが、創造性・独創性について触れている次の文章を読んで、後の問い (1)、(2) にそれぞれ答えなさい。

(注1) 田中耕一さんは(注2) この講演で、創造性について大切なことを語っている。

「誰もやっていないことをする『勇氣』と『挑戦』。失敗をしてもやり続ける『不屈の意志』。あるいは、二つの物質を誤って混ぜるという『組み合わせ』。それ自身が『新しい視点』でしたし、もったいないから試してみるか、という『遊び心』があった。それが発見につながったのは『偶然』と『努力』の結果で、信号だという『ひらめき』があったからです。こう考えると、自分は意外に、創造性を備えていたんじゃないかと思えてくるのです」

そこで会場から拍手を浴びるのだが、特にわたしが田中さんを素晴らしい人だと感じるのは、その拍手を制して、次のように語った部分である。

「いやいやちよつと待ってください。もっと言いたいことは、これらは誰もが持っているんです。それをうまく生かせるかどうかによるのではないか。私に特別、独創性があったわけではなく、皆がチャンスを持っているのに、それに気づいていないだけじゃないかと思うのです」

職人的な資質というものは、田中耕一さんが指摘するとおり「誰もが持っている」ものである。田中耕一さんだけが、特別に創造的な資質を持って生まれた人ゆえに、ノーベル賞を受賞する偉業をなしとげたというのではない。田中さんの前にもたくさん「リトル田中さん」と呼ぶことのできる人たちがいたし、いまでも日本のものづくりの現場には、たくさん「リトル田中さん」がいる、ということを見据えてこそ、田中さんの真価が理解されるのである。

田中さんが、ノーベル賞受賞のはじめての記者会見に作業服姿でテレビを通してわたしたちの前に現われて以来、常にわたしたちに親しみを感じさせてくれる存在であり続けている理由は、田中さんの言動を通して、わたしたちがいつも「リトル田中さん」を想起することができるからではないだろうか。

(小関智弘『職人学』による)

(注) 1 田中耕一——日本の化学者、技術者(一九五九)。二〇〇二年度ノーベル化学賞を受賞。

2 この講演——ノーベル化学賞の受賞記念講演を指す。田中氏は精密機器等を製作する会社で技術研究に従事しており、当時「学者でない会社員(技術者)がノーベル賞を受賞した」と話題になった。

(1) 「田中さん」は「創造性」をどう捉えていると考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

解答番号は 51。

- ① 創造性とは、たゆみなく努力を続け、最後までやり遂げた者だけが偶然に体得できることがあるものである。
- ② 創造性とは、それを誰しもが持っていることに気付き、その能力を活用しようと考える人に備わるものである。
- ③ 創造性とは、誰もが生まれながらに持っている特別な能力であり、時にノーベル賞さえもたらすものである。
- ④ 創造性とは、創造的な仕事をする職人の子どもに受け継がれ、ものづくりの現場を支えているものである。
- ⑤ 創造性とは、失敗を繰り返しながら、常に新しい視点で工夫を重ね続けていくことを可能にするものである。

(2) 「リトル田中さん」とはどのような人のことをいうのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。  
解答番号は **52**。

- ① 「田中さん」のように特別な創造的資質を持っていながら、職場では失敗ばかり繰り返し、思うような成果を上げることができない人のこと。
- ② ものづくりの現場で働く「田中さん」のようにそれぞれの領域で仕事と向き合い、これまでにない発想もためらわず取り入れようとする人のこと。
- ③ ノーベル賞を受賞した際の記者会見に作業服で臨んだ「田中さん」と同じく、その場にふさわしい服装を気にすることのない仕事熱心な人のこと。
- ④ ノーベル化学賞を受賞した「田中さん」の偉大な業績に比べれば、はるかに卑小な仕事しかしておらず、何の注目もされない平凡な人のこと。
- ⑤ 「田中さん」がノーベル化学賞を受賞する以前に、それ以外の分野でノーベル賞には及ばないながら、成し遂げた功績をたたえられた人のこと。

**二**

次の**文章Ⅰ**・**文章Ⅱ**を読んで、後の問いに答えなさい。ただし**問 8** (53) ～ **54** は、教育学部教育学科国語教育専攻を志願する者のみ答えなさい。

**文章Ⅰ**

数学の答えは千差万別だ。数学にも、様々に多様性や独自性が入り込む余地がある。とはいえ、おそらく多くの人々が考えるように、数学は極めて客観性の高い学問であり、だからこそ問題の答えが正解か不正解かはつきりさせることができる。数学において、正しいか否かは、基本的には白黒はつきりさせることができるし、「だいたい正解だ」とか「おおよそ合っている」というのは(レトリックとしてはあり得ても)本質的な意味はない。多くの人が思っているように、**A** 数学は「正しさ」を大事にする学問なのであり、もちろん数学者にとってもそれは真である。

というわけで、数学は少なくとも極めて客観的な学問なのだから、その正しさにも客観的な基準があると思われるであろう。客観的に正しいからこそ、それは学問として発達してきたのではないのか。入試問題では、答えの正否がはつきりしているからこそ、合否の判定基準に使えるのだ。正解・不正解の区別がはつきりしていなければ、そもそも客観的な採点など不可能ではないか。要するに、数学の「正しさ」は客観的なのだ。そのこと自体、程度問題はあるにしても、疑うことのできない事実ではないのか。数学の定理がある人にとって正しいなら、それは他の人にとっても正しい。日本では正しい定理が、外国では正しくないということはありえない。その意味では、数学は客観的で普遍的なのであり、その正しさも時代や地域を超えた普遍性を持つているはずだ。

しかし、そうとは言っても、数学における「正しさ」については、数学者と一般の人々の間では認識の違いがあるかもしれないし、実際にあるだろう。数学は正しくあらねばならない、というのは当然のことであり、誰も疑う者はいない。しかし、では、その「正しさ」とはなにか? と改めて訊ね<sup>たず</sup>られたらどうであろうか。その答えは人さまさまかもしれないし、時代や地域間格差だってあるかもしれない。数学者の中でも、個々人によって微妙にニュアンスの違いや温度差があり得る。もしかしたら、外国人と日本人の間になつて、「正しさ観」に微妙なずれがあるかもしれない。

そもそも数学の「正しさ」とはなにか? 一つの模範解答は「正しいとは証明があるということだ」というものであろう。数学者が一般の人々に数学という学問を説明するときなどは、このように答えることが多い。数学とは証明の学問であり、すべての法則や定理は、証明があつて初めて、その「正しさ」が確実なものとなるのである。そして、証明という技法が存在して、それが極めて効果的に

適用できるからこそ、数学の客観性と普遍的な正しさがあるのだ。そういう意味では、「正しい」証明が存在する」という言説は、数学というものの「正しさ」の力と普遍性を如実に表しているとも言えるだろう。

しかし、**B** この模範解答にも微妙なところはある。というのも、証明が導く結果は、その証明が議論の出発点として前提している事項に強く依存するからだ。当然と思われる前提から出発すれば、結果も（表向き非自明に見えても）当然なものであるうし、前提がおかしいなら、おかしいことも証明できてしまう。「正しい」証明が存在する」という考え方には、そもそも「証明は正しい結果を導く」という暗黙の了解があるわけだが、そのためには「正しい」前提から出発しなければならぬ、という制約がある。すなわち、正しさのためには証明が必要で、証明のためには正しさが前提されなければならない、ということである。要するに「卵が先かニワトリが先か」という話になってしまうわけだ。

つまるところ、「正しさ」とは、数学においてすら、まったく自明なものではない。実社会においてこそ、「正しさ」とは社会的・政治的・心理的<sup>（注）</sup>バイアスを被って、その実は**X** 模糊としているものであろう。さすがに数学では政治的バイアスはない（あってもわずか）としても、しかし、「正しさ」の**X** さは数学においても本質的には変わらない。そこには主観と客観、合理と非合理、自然と人工など、様々な対立軸がある。したがって、なにを正しさの基準とするか、正しさの根拠をどこに求めるか、といったことは、時代や地域、環境などの影響も受けるはずである。そういう意味では、「数学の普遍性・客観性」というのは、これまた一つの幻想であり、**C** 一般の人々のみならず、数学者たちでさえ、程度の差こそあれ、そのような幸福な幻想に立脚しているのだと言えるかもしれない。

数学の「正しさ」は極めて非自明なものである。「正しい」証明がある」などと簡単に片付けられる問題ではない。証明や理論を支える根底に、正しさの基準を支える前提がなければならぬからである。そしてその前提には、多くの深い物事と同様に、語り得るものと語り得ないものがある。したがって、それは時代背景や風土的影響を受けるであろうし、主観的要素も無視できないはずだ。それでもなお、それは極めて巧妙に我々人間の深層に刺さっていて、誰もが明快で客観的であると認めるだけの普遍性を勝ち得ている。そのようなことが、いかにして可能になっているのか？ 数学においてすら、「正しいとはなにか」という問いは、ハードプロブレムであると言わざるを得ないのである。

## 文章Ⅱ

そんな中であって、数学がある程度の客観性と、正否の明快さを備えている背景には、数学という学問が持っている、一種の「巧妙

さ」がある。その巧妙さとは、数学が <sup>a</sup>明示的にも潜在的にも、「自明性の境界」とでも言い得る正しさの地平を、上手に設定できていることにある。すなわち、ここから先は自明である、あるいは自明であるとみなす、という境界線が、うまく設定されているということだ。そして、それが数学においては、陰に Y に効果的に働いている。のみならず、それが現代という時代に生きる人間の自然観や、抽象的思考のパターンに（ある意味で奇跡的に）マッチしているので、その思考パターンに馴染むためのトレーニングさえすれば、基本的には誰でも「共通の場所」に、その境界線を引くことができるのである。

私はここで、何か深いことを述べようとしているわけではない。自明性の境界が巧妙に設定できているということは、数学が客観性を巧妙に留保しているということの、単なる言い換えでしかない。本当の問題は、そもそもどうしてそのようなことが可能なのか、という深層にこそ求められるべきであろう。とはいえ、<sup>D</sup>「自明性境界の巧妙な設定」という見方は、数学という学問における「正しさ」の姿を、なかなか軽快なタッチで描き出している。その意味では、便利な考え方である。

数学の正しさの深層に語り得るものと語り得ないものがあるように、自明性の境界にも語り得るものと語り得ないものがある。語り得ないものは、もちろん、明示的にはわからないが、社会や時代の影響を受けて微妙に変化するだろう。言語化できない層における自明性境界の場所を抉り出すことは、数学史や数学哲学の仕事である。逆に、数学には語り得る明示的な自明性の境界もあって、これがある程度意識的に運用されていることが、数学の特徴でもある。具体的には、公理から出発して、定理を証明していくという、<sup>b</sup>演繹的数学のスタイルの中に、我々は多くの明示的自明性境界を見出すことができる。公理とはまさに議論の出発点であり、なにを自明なものとして認めるかを明示するための命題である。そして、それすらも、歴史の中で変化を遂げてきた。<sup>（注2）</sup>ユークリッドの頃（紀元前三世紀）には、おそらく意識の上にも登って来なかったと思われる自明性が、現代においては極めて非自明な事項としてシリアスに取り扱われるということは、よくあることである。とはいえ、「公理」という形で「自明な」命題を明確に示すことは、書き手と読み手の間で共通の自明性境界を設定するための明示的な努力であり、数学の「巧妙さ」の一つである。公理の役割とは、その正しさの根拠はさておき、とりあえず証明という技法の前提をなにか適当に置いてしまう、というところにあるからだ。

おそらく、数学に限らないことだと思われるが、そもそも <sup>E</sup>学問の <sup>（注3）</sup>パラダイムとは、明示的・非明示的な自明性境界の整合的な設定系のことであるとも言えるのではないか。特に、数学においては、そのような側面が強い。そして、その基盤は地域や時代の影響を受ける。もちろん、数学の学問的基盤には、歴史の推移の中でも比較的に安定していた側面もあり、それが数学の客観性や普遍性といった臆見を支えてきた。そしてこのことは、特に西洋数学にはよく当てはまる。実際、西洋数学の自明性境界の整合系は、主として

論理学をその **c** 端緒としており、その基盤はギリシャ哲学（特にアリストテレス）以来、主にキリスト教神学を通じて概ね強固に保持されてきた。数学は他の自然科学や人文科学と比べても、格段に安定した客観性と普遍性の基盤を有していると言われるが、そこにはこのような歴史的背景が陰に **Y** に含意されている。

（加藤文元「数学と日本人」による）

（注） 1 バイアス——先入観や偏り。

2 ユークリッド——古代ギリシャの数学者。ユークリッド幾何学の祖。

3 パラダイム——物事の見方やとらえ方。

問 1 波線部 **a** ～ **c** の本文中の意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。 解答番号は **11** ～ **13**。

「**a** 明示的」

**11**

- ① はっきりとわかるように表すこと
- ② 具体性を持たせた説明をすること
- ③ 状況に応じた表現をすること
- ④ すべての要素を取り入れて示すこと
- ⑤ 多様な条件をうまく調和させること

「**b** 演繹的」

**12**

- ① 個別の事例や事象から一般的な法則を導き出すこと
- ② 仮説と検証を繰り返すなかで最適解を求めること
- ③ 議論を重ねる中で答えの正否の境界を定めること
- ④ 一般的な原理や法則から個別の結論を得ること
- ⑤ 主観的要素を排して自明的な原理を見出すこと

「**c** 端緒」

**13**

- ① 話の区切り
- ② 事例の一部
- ③ 事の始まり
- ④ 話題の転換点
- ⑤ 物事の背景

問2

☒ X、☐ Y

に入る言葉として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。なお ☒ X、☐ Y は二か所ずつあるが、それぞれ同じ言葉が入る。解答番号は  ～ .

☒ X

- ① 整然      ② 深遠      ③ 超然      ④ 明晰      ⑤ 曖昧

☐ Y

- ① 影      ② 陽      ③ 明      ④ 裏      ⑤ 表

問3

☐ A

「数学は「正しさ」を大事にする学問なのであり、もちろん数学者にとってもそれは真である」とあるが、筆者はこの「数学」や「数学者」をどのようなものとしてとらえているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は .

- ① 数学は正解か不正解かを明らかにすることができ学問であるが、数学者には多様性を許容するだけの見識を持つことが必要とされる。
- ② 数学においては、おおむね合っていることが大切であり、そのうえでいかに客観性を追求できるかが、数学者の課題とされている。
- ③ 数学は客観性の高さが求められる学問であり、数学者にはある問題に対して誰もが正しいと納得できる答えを示すことが求められる。
- ④ 数学には時代や社会を超えた正しさを示すことが求められるが、数学者には客観的な証明が不可能なものの存在を示すことが求められる。
- ⑤ 数学は解答が千差万別であることを前提とする学問であるが、数学者には独自の判断基準に基づく正しさを示すことが課題とされている。

問4

「B」この模範解答にも微妙なところはある」とあるが、筆者は「証明」と「正しさ」との関係をどのようなものとしてとらえているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は17。

- ① 数学は、「正しい」とされるものを前提として「正しさ」を証明する学問である。ところが、その前提そのものを「正しい」とするための証明が必要となる。そのため、「正しい」ことを証明ではつきりさせることは難しいのである。
- ② 数学は、「正しさ」を示すためには、証明を必要とする学問である。そして、証明できないものは、正しくないものとして排除されてしまう。そのため、数学以外の学問において、証明以外の技法で「正しさ」が見出されることがある。
- ③ 数学は、ある事項の「正しさ」を示すために、証明という技法を用いる。そして、「正しい」とされるものだけを前提として議論を出発させる。そのため、数学が「正しい」とするものは、すべてが「正しい」ものである。
- ④ 数学は、一般の人が理解できるように「正しさ」を説明できなければならない。そして、「証明」という技法を用いることで「正しさ」を明らかにしているのである。そのため、難解な証明を必要とするものは「正しい」とは言えないのである。
- ⑤ 数学は、「正しい」と結論づけるために、証明の存在を必要とする。ところが、証明は、数学においてのみ通用する法則や定理を前提としている。そのため、数学の示す「正しさ」とは、限られた社会だけでしか通用しないものである。

問5

「C」一般の人々のみならず、数学者たちでさえ、程度の差こそあれ、そのような幸福な幻想に立脚している」とあるが、筆者は「幸福な幻想」とは、どのような状態であると考えているか。その内容として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は18。

- ① 数学とは、客観性や合理性を基準にする一方で、主観や非合理なども許容する学問であると認識している状態。
- ② 数学とは、正しさの基準があいまいなものであっても、歴史を重ねる中で解消されていくと理解している状態。
- ③ 数学とは、様々な対立軸があっても、一つの真理を導き出すことができる学問であると深く信じている状態。
- ④ 数学とは、完全なものではなく、実社会との関係性において正しさの基準が変化すると理解している状態。
- ⑤ 数学とは、どのような状況でも普遍性と客観性を有する学問であることを信じて疑わない状態。

## 問6

「D」「自明性境界の巧妙な設定」という見方」について、筆者の考え方を説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **19**。

- ① 数学では、すでに自明となっている前提のところに境界線を設け、非自明なものが自明なものになるたび、その境界線を変更することで、客観性を担保している。
- ② 数学では、自明であることを前提とする境界線を任意に設定し、その境界の先にある非自明なものは思考の対象外にすることで、客観性を留保している。
- ③ 数学では、自明・非自明を明確に区切る共通の境界線を設定し、自明となっているものだけで論理を組み立てることで、客観性を保とうとしている。
- ④ 数学では、誰もが自明であるとされる前提のところに境界線を設け、社会や時代の状況に左右されることなくその境界線を維持することで、客観性を保とうとしている。
- ⑤ 数学では、非自明なものを排除するための境界線を設け、自明なものと非自明なものを明確に区分して理論を組み立てることで、客観性を留保している。

## 問7

「E」学問のパラダイムとは、明示的・非明示的な自明性境界の整合的な設定系のことである」について、筆者の考え方を説明したものとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **20**。

- ① 学問とは、非明示的なものを明示的なものにしていくことを使命としている。そのため、我々には、自明・非自明の境界そのものの存在を疑問視し、設定の仕方や内容について常に思考と議論を深めることが求められる。
- ② 学問を進めるうえでは、ある種の巧妙さを持つことで深化したといえる。そのため、我々には、自明・非自明の境界を適当に設定することで議論を活発なものとし、境界の存在をより明示的なものにしていくことが求められる。
- ③ 学問とは、歴史に左右されることなく安定していることが求められる。そのため、我々には、歴史の推移の中で自明となつて

きた自明・非自明の境界を尊重し、その前提から議論を進めることが求められる。

④ 学問を進めるうえでは、議論の出発点となる基盤を設定することが必要である。そのため、我々には、自明・非自明の境界をあらかじめ設定し、その境界の存在や内容についての共通認識を持つことが求められる。

⑤ 学問とは、自明・非自明の境界を前提としなければ進めることはできない。そのため、我々には、明示的にできなかったものを言語化する努力を継続し、境界そのものに普遍性を持たせることが求められる。

**\* 次の問 8 (53 ～ 54) は、国語教育専攻を志願する者のみ解答すること。**

問 8 次に示す**文章Ⅲ**は、**文章Ⅰ・文章Ⅱ**に続く文章の冒頭部分である。また、それに続く枠囲み内の会話は、これらの文章を読んだ後の、教師と生徒の話し合いの様子である。これらを読んで、後の問い(1)、(2)にそれぞれ答えなさい。

### 文章Ⅲ

江戸時代の日本には、現在でも「和算」と呼ばれる、独特な数学の伝統があった。その草創期には、中国の数学からの影響が大きかったものと推察されるが、比較的短期間に中国数学からの輸入数学から脱して、独自のやり方や技術を蓄えるまでにいたったことは、よく知られている。その歴史的極大点の一つに、(注) 関孝和やその弟子たちによる、いわゆる「関流」の和算があり、そこでは同時期の西洋数学に引けをとらないような、驚くべき研究がなされていた。例えば、現在では「ベルヌーイ数」と呼ばれている、整数論などで基本的な役割を果たす重要な数列があるが、これは一七一三年にスイスの数学者であるヤコブ・ベルヌーイが発表した著作の中で登場したことから、この名前が付いている。実は関もこの数列に到達していたのであるが、それが関の死後、関の弟子たちによって書物の中に著されたのは、ベルヌーイの著作の一年前のことであった。関や関の弟子たち、特に建部賢明・賢弘の兄弟によって研究された数学には、当時の西洋の同時代人も瞠目どうもくしたであろう、驚くほど進んだ内容のものが数多くある。

(注) 関孝和——江戸時代中期の数学者(一六四〇頃～一七〇八)。

|     |                                                                                            |    |
|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| 教師  | この文章を読んで、数学という学問についてどのような理解が進みましたか。                                                        |    |
| 生徒A | 文章Ⅰからは、数学でも「正しさ」を証明することは難しいのだということがわかりました。                                                 |    |
| 生徒B | 「正しさ」と証明との関係は、「卵が先かニワトリが先か」ということでした。                                                       |    |
| 教師  | 次に、文章Ⅱでは、数学という学問がどのように「自明性」を高めてきたか、について論じられていました。                                          |    |
| 生徒C | 数学は、「自明性の境界」を巧妙に設定している、という点がポイントでした。                                                       |    |
| 教師  | そうですね。筆者は、数学と「正しさ」の関係性について、 <table border="1"><tr><td>Z1</td></tr></table> と論じていますね。       | Z1 |
| Z1  |                                                                                            |    |
| 生徒D | これまでの話を踏まえて、改めて文章Ⅲを読んでみると、筆者は、 <table border="1"><tr><td>Z2</td></tr></table> と考えていると思います。 | Z2 |
| Z2  |                                                                                            |    |
| 教師  | Dさんの指摘から、この文章の表題である「数学と日本人」の意図するところがうかがえますね。                                               |    |

(1)

Z1

に入る発言として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は53。

- ① 「正しさ」の基準は、地域や時代の影響を受けて変化するにもかかわらず、数学は、長い歴史を重ねる中で、他の学問に比べて安定した基盤を築いてきた
- ② 「正しさ」の基準は、時代背景や風土的な影響を受けることから、数学は、キリスト教神学を背景とする西洋数学に依拠することで、その基盤を築いてきた
- ③ 「正しさ」の基準は、最終的には個人の判断にゆだねられるため、数学は、千差万別の公理の中から定理を導きだすことで、その基盤を築いてきた
- ④ 「正しさ」の基準は、絶対的な客観性を有していることが前提となるので、数学は、長年にわたり定理の証明を重ねることで、普遍性の基盤を築いてきた
- ⑤ 「正しさ」の基準は、主観的要素が影響を及ぼすため、数学は、客観性を担保するために論理学や哲学を用いることで、その

基盤を築いてきた

(2)

Z 2

に入る発言として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は **54**。

- ① 江戸時代の日本に優れた数学者がいたことで、今後、日本人が、西洋数学の持つ「正しさ」の基盤を受け入れていけるのではないか
- ② 長い年月をかけて「正しさ」の基盤を築いてきた西洋数学に比べて、江戸時代から始まる日本の数学は、その遅れを取り戻す努力が必要だ
- ③ 「正しさ」とは多様なものであるため、今後、日本人が西洋人とは異なる発想で、新しい「正しさ」の基盤を生み出すこともある
- ④ 日本の数学は、中国の影響を強く受けているため、今後、西洋数学の思想や文化を取り入れることで、「正しさ」の基盤を築いていける
- ⑤ 江戸時代の数学は独自に発展したものであるため、今後、西洋数学の基準による評価を受けるまで、その「正しさ」を主張することは難しい

三

漢字・語句について、次の問いに答えなさい。

問 A～Hの各傍線部に相当する漢字を含むものはどれか。また、I～Jの空欄に入れるのに最も適当な語句はどれか。それぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は **21** ～ **30**。

A 通信エイセイで中継する。 **21**

① エイヨある役職に就く。

③ 真理はエイキュウに不変だ。

⑤ エイサイ教育を受けて育つ。

B 注意をカンキする。 **22**

① カンマンな動きをする。

③ 議会で証人をカンモンする。

⑤ 衆人カンシ。

C 勇猛カカンに闘う。 **23**

① 仕事でセイカを残す。

③ カゾクで旅行する。

⑤ 問題をカシ化する。

D キョギ答弁により野党の追及を受ける。 **24**

① シツギ応答の時間です。

③ ギリの兄の意見を聞く。

⑤ ギキョクを上演する。

E 情報技術をクシする。 **25**

② 本作品はゼンエイ芸術に属する。  
④ 壁面に画像をトウエイする。

② 地震で道路がカンボツする。  
④ ゲンカンの極地で暮らす。

② 累進カゼイ。  
④ 物語がカキョウに入る。

② ギジ進行にご協力ください。  
④ ギゼン者と言われても寄付をする。

## F

- ① クモツをささげて祈る。  
 ③ 旅費をクメンする。  
 ⑤ 会社再建のためにクトウする。

26

## F

- コウジョウ的な減税を法改正で行う。  
 ① 毎年コウレイの行事に顔を出す。  
 ③ 地域産業のシンコウを図る。  
 ⑤ 病状はショウコウ状態を保つ。

- ② 国際平和にコウケンする。  
 ④ 両者のキンコウが崩れる。

## G

- 冬のナマリイロの空を見上げる。  
 ① 雨天で試合がジュンエンになる。  
 ③ 豪雪地帯ではアエンぶきの屋根を見かける。  
 ⑤ エンコを頼って入社する。

27

- ② 傷口がエンショウを起こす。  
 ④ エンダイな計画が打ち立てられた。

## H

- 出発を早めるようウナガす。  
 ① 活動をソクシンする。  
 ③ 気象台がフウソクを測る。  
 ⑤ ゲンソクにのっとり行動する。

28

- ② アンソクの日々を過ごす。  
 ④ ソクザに対応する。

## I

- ① 識見  
 ② 当面  
 ③ 当然  
 ④ 即妙  
 ⑤ 即席

29

- ④ 即妙  
 ⑤ 即席

## J

- ① 観桜  
 ② 菊花  
 ③ 出藍  
 ④ 熟桃  
 ⑤ 破竹

30

(**全学共通**の問題は終わり)

（  
余  
白  
）

# 国語（国語教育専攻）

\*ここから先は、国語教育専攻を志願する者のみ解答すること。

一 全学共通問題（前掲）の各問いに答え **1** ～ **10**、さらに問 **8** にも答えなさい **51** ～ **52**。

二 全学共通問題（前掲）の各問いに答え **11** ～ **20**、さらに問 **8** にも答えなさい **53** ～ **54**。

三 全学共通問題（前掲）の各問いに答えなさい **21** ～ **30**。

\* 次のページ以降にある **四**・**五**の各問いに答えなさい **55** ～ **77**。

四

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(注1) 楽天言へるが如し。「人に皆一つの癖あり。我が癖は章句にあり」とて、何事も思ひ捨て、(注2) 道行に入りて後も、文章を翫(もてあそ)ぶ癖の、忘れ難き事を言へる **a** なるべし。 **A** 癖とは改め難く、しつて失も忘れ、運に任せられ思はるる事なり。人毎に、好みしつけぬ事は、癖と成りて、世々に自ら好みせらるるなり。

人の心は、我が好む事に財も費へ、一身も疲れ、心も苦しく、暇(いとま)も要らば、いたまずして、我が請けざる事を人の好むをば、よしなき事と思ひて、謗(そし)る人 **b** の、我れを謗る事をば知らぬにこそ。色に耽(ふけ)る人は、色欲の境のために財を費やし、病のおこり、禍(わざはひ)の来らむ事を忘る。詩歌管絃(くわんげん)、酒宴(注3) 博奕(ばくえき)を愛する人、 **B** 皆かくの如きなり。

ある人、囲碁を愛して、冬の夜、 **A** よもすがら打つに、(注4) 中風(ちゅうふう)の氣ありて、手冷ゆる故に、土器に石を炒(い)らせて打ちけり。油も尽きければ、(注5) 萩(た)を焼(た)きける灰の、身にかかりければ、笠をうち着て打ち明かす。近き程にて聞きし事なり。

また、下手法師(げす)、酒を好む事侍りき。直(あたひ)も無きままに、ただ一つ着たる帷(かたびら)を、片袖を解きて、買ひて呑みけり。

また、餅を好む入道ありけり。医師(くすし)なりければ、呼びて、好む由を聞きて、主、餅をさせけるが、春(つ)く声を聞きて、この入道、「おうおう」と声を揚げ、おめきつつ、果ては畳の縁(へり)に摺(つ)み付きて、もだえこがれて、「あら堪へがたや。入道が聞かざる所にて春(ある)か **x** せたまへ。彼の声を聞くは堪へがたく候」と云ひければ、これ程の事は希(まれ)なれども、人毎に好む事あり。いかに物を好まぬ者も、或は **イ** 徒(いた)らなるを好み、或は昼寝を好む者あり。ある僧は、朝の粥(かゆ)を忘れて食は **I** ずして、日(た)闌(た)くるまで起きず。「いかに粥をば **ウ** 召(め)さぬぞ」と人云へば、「粥よりも、寝たるは遙かに味の吉きなり」と云ひけり。

在世に、(注6) 比丘(びく)ありて、食より昼眠(ひるね)を好みしを、仏、七日ありて死すべきを知らず、眠を好む事を呵責(かやく)して、昔、(注7) 蝸(おうちゆう)虫(注8) 螺(らちゆう)虫にて、一度眠りて、百千歳を過ぎし故に、 **C** 今(いま)もかかる由を説き給ひければ、慚愧(ざんき)し、修行して、道を悟りてけり。

(注9) 愚老、昔より物語を愛し好み侍りし故に、修行の暇をかきて、徒ら事を書き置き **II** 侍(まち)る。身ながらも、この癖やまざる故なり。

(『沙石集』による)

(注) 1 楽天——中唐の詩人である白居易(七七二～八四六)のこと。

2 道行——仏道の修行のこと。

3 博奕ばくえき——囲碁・双六・博打など勝負を争う遊び。

4 中風の気ちゆうふうけ——脳卒中の気配。

5 萩を焼たきける灰——灯油の代わりに枯れた萩を焼くと出た灰。

6 比丘びく——男性の出家修行者。

7 蠅おうちゆう虫——牛馬の皮の内に生息しているとされる、アブの幼虫。

8 螺旋らちゆう虫——カタツムリなどの螺旋状の殻を有する貝類。

9 愚老——ここでは、書き手である無住(一二二六～一三一二)のこと。

問1 「aなる」、「bの」の助動詞及び助詞の本文中における意味・用法として適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びな

さい。解答番号は55～56。

「aなる」 ① 推定 ② 断定 ③ 存在 ④ 過去 ⑤ 詠嘆

「bの」 ① 並列 ② 同格 ③ 主格 ④ 連体修飾格 ⑤ 比喩

問2 「x世たまへ」は、誰に対する敬意を示しているか、次の中から一つ選びなさい。解答番号は57。

- ① 下手法師 ② 入道 ③ 医師 ④ 主 ⑤ 愚老

問3

□で囲んだ活用語Ⅰ～Ⅱの本文における活用形として適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。なお、同じものを重ねて用いても構わない。解答番号は58～59。

Ⅰ  
ず

58

Ⅱ  
侍る

59

- ① 未然形      ② 連用形      ③ 終止形      ④ 連体形      ⑤ 已然形      ⑥ 命令形

問4

「アよもすがら」、「イ徒らなる」、「ウ召さぬ」の本文中における意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は60～62。

「アよもすがら」

60

- ① 終日  
② 熱心に  
③ 一睡もせず  
④ 夜中まで  
⑤ 一晩中

「イ徒らなる」

61

- ① 空っぽである  
② 悪ふざけをする  
③ 怠ける  
④ つまらない  
⑤ 死ぬ

「ウ召さぬ」

62

- ① お気に召さない  
② ご覧にならない  
③ 召し上がらない  
④ 呼び寄せなされた  
⑤ お食べになった

問5

「A 癖とは改め難く、しつて失も忘れ、運に任せられ思はる事なり」とあるが、これはどのようなことを言ったものか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は63。

- ① 一度身についた悪い癖を改めるには習慣づけることが大切で、運任せにしてはいけないということ。
- ② 習慣となった人間の癖はなかなか直すことができず、運命として受け入れるしかないということ。
- ③ 人の癖は善し悪しを吟味することが難しく、矯正する場合も成り行きに任せるしかないということ。
- ④ きちんと整えることが難しいのが人の癖であり、修正しても結局その人任せになってしまうということ。
- ⑤ 癖は体得するものではなく生まれながらに備わっているものなのに、それを忘れがちであるということ。

問6

「B 皆かくの如きなり」とあるが、「かくの如き」が指す状況の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は64。

- ① 時間や金を浪費するばかりか、将来起こりうるいろんな危険性に思いを至らせることなく、自分の欲望に執心する。
- ② 自分の欲望充足のためには、すべての財産をつぎ込むことを厭わず、病気になるのはじめて己の愚かさを自覚する。
- ③ 人から悪く言われてもそれを苦にすることなく、自分の欲望にしたがって身体を壊しても酒と賭け事にのめり込む。
- ④ 色欲にまみれると暮らしの中で正常な判断ができなくなるほど心を病んでしまい、むやみやたらに散財してしまう。
- ⑤ 人間の我欲には際限がなく、いちど取り憑かれると心身が疲弊することも気付かずに全財産を使い果たしてしまう。

問7

「**C** 今もかかる由を説き給ひければ」の現代語訳として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は**65**。

- ① 比丘は仏に今に至るまで昼寝を好むのは良くないと説教されたので
- ② 比丘は虫に死期が迫っているのに寝てばかりいると忠告されたら
- ③ 比丘は仏に過去世の因縁で一度眠ると何年も起きられないと諭されたら
- ④ 仏は比丘に今もこうして寝てばかりいるとお説きになったので
- ⑤ 虫は仏に過去世の報いで今も昼寝が好きだと夢判断をされたため

問8

本文の内容と合致しないものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は**66**。

- ① 白居易は人には皆一つの癖があり、自分の癖は文章を作ることだと言った。
- ② 無住は昔から雑談が好きだったため、修行の合間に他愛のないことを書き留めている。
- ③ 餅をつく音を客に聞かせてしまった店の主は、自分もその餅を無性に食べたくなった。
- ④ 脳卒中の気配のある囲碁好きの人は手が冷えるので、碁石を温めてまで打ち続けた。
- ⑤ 酒好きで身分の低い法師は、着ていた着物の片袖を売ってまで酒を飲んだ。

問9

本文は『沙石集』の一節である。これと同じジャンルに属する文学作品を次の中から一つ選びなさい。解答番号は**67**。

- ① 大鏡
- ② 徒然草
- ③ とはすがたり
- ④ 平家物語
- ⑤ 発心集

**五**

漢字・語句について、次の問いに答えなさい。

問 **A**～**H**の各傍線部に相当する漢字を含むものはどれか。また、**I**～**J**の空欄に入れるのに最も適当な語句はどれか。それぞれ一つずつ選べなさい。解答番号は **68**～**77**。

**A** 水力を電氣にヘン|カン|する。 **68**

① カン|ダイ|な処置をとる。

③ 教室のカン|キ|を呼びかける。

⑤ サークルへのカン|ユウ|活動を行う。

② 絵画をカン|テイ|する。

④ 首相カン|テイ|で取材をする。

**B** 法令にジュン|キョ|する。 **69**

① 条約をヒ|ジュン|する。

③ ジュン|リョウ|な品質のバター。

⑤ ジュウ|ジュン|な性格だ。

② ジュン|タク|な資金を供給する。

④ ヒョウ|ジュン|的な見解を示す。

**C** リズミカルな音楽にトウ|スイ|する。 **70**

① トウ|サク|した欲望を抑える。

③ ボウ|トウ|から結論を述べる。

⑤ 師のクン|トウ|を受ける。

② 一国をトウ|チ|する。

④ ザツ|トウ|の中へ繰り出す。

**D** 社会ホシヨウ|を充実させる。 **71**

① 会議の開催をテイシヨウ|する。

③ 要求を先方にシヨウ|チ|させる。

⑤ そんなことはロンシヨウ|不可能だ。

② 業務にシシヨウ|をきたす。

④ 社債のシヨウ|カン|期限が迫る。

**E** 名演技にカン|タン|の声がある。 **72**

## F

トイキがもれる。

73

① アンソクの日々を過ごす。

③ フウソクを測って予報に生かす。

⑤ ゲンソクに立ち返って行動する。

① 体育館で体をキタえる。

③ ミジカい期間だが世話になった。

⑤ ナゲかわしい風潮が広がっている。

② 学校の役員をニナう。

④ アワい恋心を抱いていた。

② 友の意外なソクメンを知る。

④ ソクザに対応する。

## G

彼は服装にムトンチャクな人である。

74

① 北海道にトンデンヘイを置いた。

③ ヨウトン業者がえさを買う。

⑤ 自分のグドンさに耐えられない。

② いざというときにトンチがきく。

④ ドンテンのうちに洗濯物を入れる。

## H

研究のシュウタイセイを本にまとめる。

75

① 彼こそフセイシュツの名選手である。

③ ソセイ乱造ではないけない。

⑤ 大学祭はセイキョウだった。

② 為政者が言論をトウセイする。

④ 新学舎のラクセイを祝う。

## I

前任者の二の[ ]を演じる。

76

① 矢

② 腕

③ 舞

④ 足

⑤ 句

## J

おさななじみの二人は気が[ ]間柄である。

77

① 遠い

② 早い

③ 気でない

④ 置けない

⑤ 休む

(国語教育専攻の問題は終わり)

（  
余  
白  
）

（  
余  
白  
）

